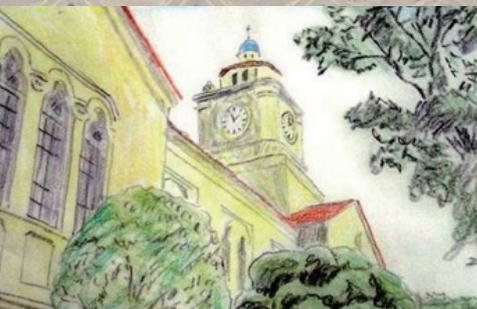


Museum News



絵：柳田 基

2022 展覧会

※時計台空調工事のため、5月～6月は休館いたします。

平常展

学院を築いた4人の院長

2022.7.4日▶10.1日

平常展

学院の創立から上ヶ原キャンパスへの移転、そして大学昇格までを支えた4人の院長について紹介します。

企画展

美術と文芸シリーズ

新収蔵品 洋画家 大森啓助コレクション展(仮)

2022.10.17日▶12.17日

創立から戦前期までの関西学院で青春時代をすごした作家たちを見つめる「美術と文芸」シリーズの第2弾です。今回は2019年に大学博物館に寄贈された洋画家大森啓助(1898-1987)の作品を紹介します。

継続するコロナ禍と新体制の博物館

新体制でのスタート

博物館開設準備室時代から室長として博物館の開館に尽力し、その後も館長として長く本館の充実にあたられた河上繁樹先生と副館長の古川彰先生が2020年3月にともに退任され、同年4月より、館長に加藤哲弘先生が就任され、濱田が副館長となりました。この前後より拡大が顕著となった新型コロナウイルスによって、博物館もほぼ半年間の休館を強いられ、その後も、学内者限定の開館などの対応が継続して必要となるなど、文字通り困難な船出の新体制でした。そのようななか、加藤館長は、諸事を適切に配置し、この難局に対応され、同時に、初代館長から継承する当博物館の使命を受け継ぎつつ、館にさらなる充実をもたらしました。

他方、このような状況のなかでも順調な進展を得ることができたことには、準備室時代から河上初代館長とともに、当館の基盤をつくり、その後の運営実務を担ってきた高木香奈子学芸員の力がありました。休館等を挟みつつも、実施すべき企画を順調に進めることができたのは高木学芸員がいてこそであったと思います。

2022年3月に、この二人がそろって退職にもなって退任されました。かわって、2022年度には、神学部橋本祐樹先生(キリスト教神学)が副館長に、また昨年度まで高木学芸員の業務をサポートしてきた倉田麻里絵前学芸アシスタントが学芸員に、濱田が館長に、それぞれ着任しました。2022年度の博物館は、この新たな体制にてスタートすることになります。

継続するコロナ禍のなかで

この2年あまりの間、各地の博物館・美術館では、コロナ禍に対応するために様々な工夫がなされてきました。第10号の本通信でも触れたように、オンラインメディアを積極的に活用して、遠隔でも展示を見ることができるよう取り組みなども複数みられました。こうした取り組みは、部分的に現在でも継続しているようですが、いわゆる展示を見せる場においては、ほとんどの施設において、入場制限等を導入しながら、通常の来館を受け入れる形に戻っているのかと思います。コロナ禍が「日常化」してきたということが(これ自体は良いこととは思えません)、その大きな背景の一つとしてあるでしょ

う。また、オンラインでモノを見せることにつきまとう著作権の問題もあるのかもしれませんが。

と同時に、博物館・美術館が、コロナ禍を起点にヴァーチャルに軸足を置くような方向に強く進まなかったことは、これら施設が、生の「モノ」とともにあるのだということ、改めて知らしめてくれたようにも思います。加藤前館長は、初代の河上館長から継承する博物館の使命として、人とモノを結びつけることで「心に響くモノの魅力を発見し、守り、輝かせること」を掲げていました。このことは、人がモノに触れることができないという状況が発生させたコロナ禍にあって、より切実なものとして、浮上する事柄と思います。

その一方で、オンラインツールが博物館の展示にもたらす事柄も多くあります。現在(2022年4月)、大阪の国立民族学博物館で開催されている「邂逅する写真たちーモンゴルの100年前と今」展を紹介する、とある新聞記事では、この企画展で展示される旧写真が、対面調査が制限される中で行われたオンライン上での情報収集＝「デジタルフィールドワーク」の成果として発見され、それが重要な歴史の一ページを参照するに至る状況が紹介されていました(毎日新聞、2022年4月3日)。もちろん、そのようなことは、以前からしばしばありましたが、人と人、人とモノとの交流が難しくなったコロナ禍の社会が、これを進展させたという側面もあるといえるでしょう。

人とモノと情報と 一次の時代の博物館へ向かって

学芸員も含めた交代を経た今年度は、当館にとって加藤館長となった2年前よりもさらに大きな変化の年とも言えます。しかし、例えば、キリスト教神学を専門とする橋本新副館長の知識は、大学の歴史を展示の軸の一つとする本博物館にとっては、とても大きな後押しになるはず。新体制を迎えた大学博物館では、新たに加わったスタッフの、こうした力も総合しながら、人とモノと、情報の網とが、これまでとは少し変わった形で結びつきながら展開する現在の状況をうまく捉えながら、「モノ」を主役としつつ、これらを効果的に連動させるような展示作りを目指していきたいと思っています。

(大学博物館長 濱田琢司)

展覧会報告 I

平常展

ランバス没後 100 年 学院の誕生・原田の森時代

特集陳列

新収蔵品展 神原浩コレクション

2021.8.30(月) ▶ 10.2(日)

9:30 ~ 16:30

※休館：日曜日、祝日

※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、
本学学生・教職員のみ入館可

開館日数 28日



原田の森キャンパス (1917年)

平常展

「ランバス没後 100 年 学院の誕生・ 原田の森時代」

関西学院の創立者は、アメリカ・南メソジスト
監督教会の宣教師ウォルター・ラッセル・ランバ
スです。ランバスは1886年に日本伝道のために
前任地の中国から派遣されてきました。彼が家
族とともに赴任した頃の神戸は、すでにキリス
ト教各派の宣教師が伝道活動をしており、いく
つもの教会や学校が建てられていました。この
ようななかでランバスは、西日本における伝道
の長期展望として伝道者の養成とキリスト教主
義にもとづく青少年教育をおこなうため、男子
校の設立を目指しました。それが、1889年9月
28日原田の森(現在の神戸市灘区)に創立された
関西学院です。

2021年はランバス没後100年にあたります。
これを記念して、平常展ではランバスに注目し
ながら学院が誕生した原田の森でのキャンパス
の様子をご紹介します。

没後100年

関西学院の創立者

写真「原田の森キャンパス」(上図)の中央にあ
る建物は、教育活動の基本となる礼拝行事のた
めに学院が初めて建築した独立の礼拝堂、プラ
ンチ・メモリアル・チャペルです。原田の森校地
取得の際、資金を提供したヴァージニア州の銀
行家トマス・ブランチの息子などの資金協力を
得て建設されました。このチャペルはランバス

の告別式が執りおこなわれた場所でもあります。
現在、この建物は神戸市内に現存する最古の
レンガ造り教会建築物であり、「神戸文学館」と
して活用されています。

本展覧会では、初めてランバスの遺髪をご覧
いただきました。この遺髪は神戸のパルモア学
院(2021年4月をもって廃校)を経て、ランバス
関係姉妹校である啓明学院と関西学院で保管さ
れることになったものです。ランバスは1921年
9月26日に横浜で召天し、遺骨は彼の生まれ故
郷である上海に運ばれました。上海で葬儀が執
りおこなわれた10月11日、原田の森では中央
講堂の礎石式があり、ランバスの遺髪は、この講
堂の礎石にも納められました。

特集陳列

「新収蔵品展 神原浩コレクション」

特集陳列では、2019年に大学博物館へ寄贈
された神原浩の油彩4点とエッチング1点を初
公開しました。神原は1908年に関西学院普通
学部に入學し、卒業後は一度上京したものの、
1913年には高等学部商科へ入學しました。しか
し、絵が好きあまり落第の危機に瀕したこと
もあり、退學とメキシコへの渡航を決意します。
1920年にはフランスへ渡り、滞在中にサロン・
ドートヌで二度入選を果たしました。そして
帰国後は関西学院旧制中学部の初代美術教師を
務めながら、油彩画やエッチングを制作しまし
た。花や海岸風景を描いた新収蔵品の5点は、こ
の頃の作品です。

原田の森と上ヶ原

神原と関西学院

新収蔵品と合わせて、神原が描き出した学院
の風景もご覧いただきました。画家の道に進む
ため、原田の森キャンパスを離れた神原が美術
教師として戻ったのは、上ヶ原移転後の学院で
した。神原は、かつて友人らとともに絵を描いて
過ごした、懐かしい原田の森や、移転して間もな
い頃の上ヶ原の姿を描いた作品を残しています。
両キャンパスで過ごした彼が見つめた学院
の様子を、ご紹介しました。



展示室の様子 (平常展)



展示室の様子 (特集陳列)

展覧会報告 II

企画展

第45回キリスト教美術展

2016年の第40回展に続き、キリスト教美術協会との共催で開催しました。協会に出品された作品に加え、関西学院で所蔵する作品がこの関西展のみに出品されました。

2021.10.16(土)▶12.18(土)

9:30～16:30

※休館：日曜日、祝日

(ただし11月14日回は開館)

※10月16日のみ、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、本学学生・教職員のみ入館可

開館日数 54日

入館者数 2,281人



技法による違いを味わう

多彩な版画表現

キリスト教美術協会によって1973年から開催されてきた「キリスト教美術展」が2021年で第45回を迎えました。これを記念し、2022年に開催される東京展(キリスト教美術協会主催)を前に、キリスト教美術協会と関西学院大学博物館の共催で関西展を開催しました。関西展は第40回展(2016年)に続き、2回目の開催です。

本展には絵画作品19点と、彫刻作品3点が出品されました。絵画作品では油彩や水彩のほかにも、多彩な技法がみられました。たとえば渡辺禎雄の《ノアの箱舟》とアルベルト・カルペンティールの《十字架》、荻太郎の《婦人像》では版画の技法が用いられていますが、その仕上げ方には違いがあります。渡辺の作品は、型紙と糊を用いる型染版画という技法で染められていま

す。一つひとつの色がくっきりとしていて、動物たちを乗せて大洪水を超えゆく箱舟が力強い存在感をもってあらわされています。一方カルペンティールの作品は版画を刷ったあとに着色がされたものです。衣服や葉の淡いグラデーションは、磔刑の場面に優しい同情を寄せています。そして荻の作品はシルクスクリーンで制作されています。この技法では細かな穴のあいた網目状の布を用いて、染料が通過するところとしないうところをつくり染め分けます。制約の多い渡辺の型染版画と比べて、版の制作過程などにおいて自由度が高い技法です。

また版画作品には、エディションナンバーと呼ばれる番号がついています。これは同じ版から刷られた作品がいくつあり、そのうちの何枚目であるかをあらわすものです。荻の作品には左下に「7/23」とあり、23枚刷ったうちの7番目の作品だということがわかります。額縁など

で隠れてしまっている場合もありますが、版画作品を鑑賞する際には探してみてください。

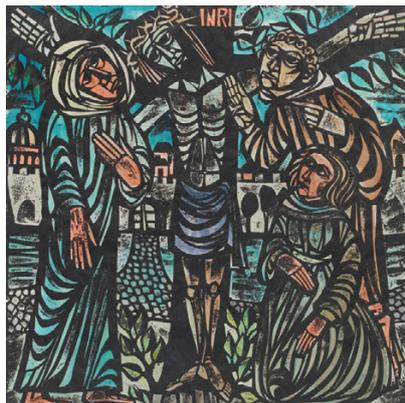
東京展と寄贈作品のおしらせ

東京展(於 銀座協会・東京福音会センター)は2022年6月23日(木)から7月5日(火)まで開催される予定です。関西展とは出品作家も異なりますので、機会がありましたら是非ご覧ください。

また本展に出品された早矢仕素子の《その声を聞いたものは生きる》と、眞野真理子の《日々の祈り》の2点が、弊館に寄贈されることとなりました。《その声を聞いたものは生きる》は、作家がこれまで避けてきた磔刑という主題に向き合う転機となった作品です。東京展閉幕後に寄贈され、今後の展覧会でも公開してまいりますので、どうぞお楽しみにお待ちください。



渡辺禎雄《ノアの箱舟》1984年、型染版画



アルベルト・カルペンティール《十字架》
制作年不詳、版画に着色



荻太郎《婦人像》2002年、シルクスクリーン

開催中の特集陳列

染織品の修理

2022年1月17日(日)～4月23日(日)

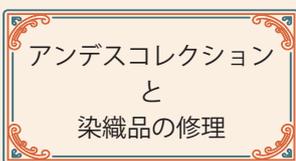
第1期:1月17日(日)～2月16日(日)

第2期:2月18日(金)～3月19日(日)

第3期:3月23日(水)～4月23日(日)

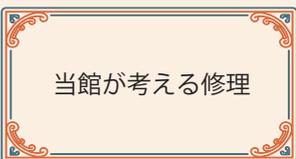
※休館:日曜日、祝日、2月1日(火)～7日(日)、
2月17日(金)、3月22日(火)

博物館の資料はその品質や形状などすぐに展示できる状態で收藏されるものばかりではありません。損傷のあるものは修理を施し、大きな損傷がないものについても安全に展示できる状態に整えてから展示室で陳列、公開します。これは資料を活用しながらその状態をできる限り損なわないように維持して未来の人々に伝えていくためです。博物館が資料の保存と活用を両立するために取り組む修理や保全について当館の古代アンデス染織品コレクションを例にご紹介します。



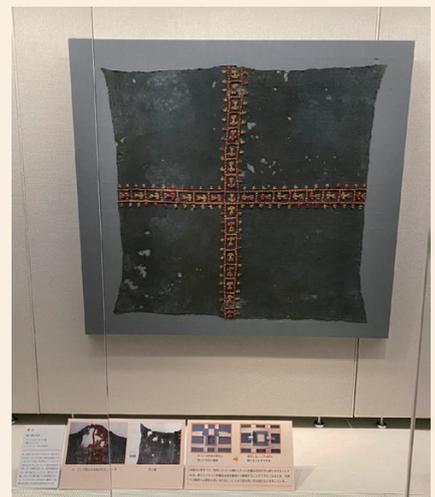
当館の古代アンデス染織品コレクションは3名の方から寄贈されたAコレクション(2011年、2018年寄贈)、梶谷コレクション(2014年寄贈)、水嶋コレクション(2014年寄贈)から成っています。これらは古いものでは紀元前14-9世紀、新しいものでも紀元15-16世紀の染織品のコレクションであるため、傷のない完全な状態で残っているものは稀で、一部が断片として残ったものや破れているものがたくさんあります。当館に寄贈くださった旧蔵者も傷んだ染織品を安全に鑑賞、保管するために工夫されてきました。特にニューヨークのメトロポリタン美術館で長年にわたり染織品の保存修復に取り組んでこられた梶谷宣子先生からの寄贈品にはその経験が詰め込まれており、当館で行う染織品修理でもその方法を参考にしています。

このほか、染織品の修理では次のようなことに留意して修理を行います。一つ目は予防を重視することです。一度傷んでしまった作品を完全に元通りに戻すことはできないので、傷まないように予防しながら保存します。次にオリジナルを残すことを考えます。オリジナルの形や縫い糸などのパーツをできるだけ残し、新たに手を加える部分は必要最低限にとどめます。そして何よりも安全性を最優先します。修理は一つの作品に対して短期間に何度も繰り返す行うものではなく、一度修理した作品は数十年ほどその状態で保存されます。このため長期的に安定した材質や修理方法を選ぶ必要があります。また将来、より安全で効果的な修理方法が開発された時のために保存修復の材質や技法は修理前の状態に戻すことができる(可逆性のある)ものを選ぶことも大切です。そして修理後の保存や活用、次の修理に役立てるために作品の状態や修理方法、修理の解体時に知られた知見について克明に記録をとります。

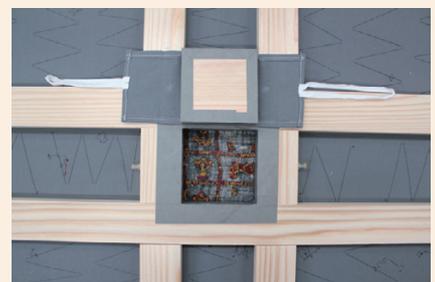


「修理」や「修復」というと、修繕して元通りにすることを想像する人もいるかもしれませんが。しかし文化財の修理では必ずしも元通りにすることだけを考えているわけではありません。例えば、当館では断片として残ったものや破れたものは、作られた当初の形に復元することはせず、現在残っているものの状態

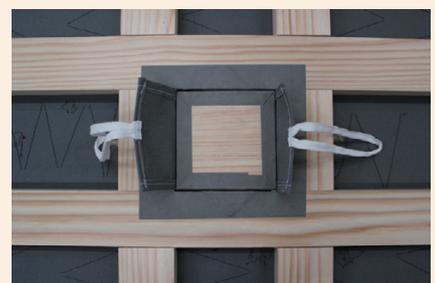
を悪化させないことを第一に考えています。また染織品を繕って作品そのものを修理するだけでなく、收藏庫での保管から展示室での陳列まで一連の作業を安全に行えるように保管や展示の形態を考えることも大切です。当館の古代アンデス染織品の資料数は500点を超えるため一朝一夕に全作品の修理を終えることはできませんが、少しずつでも修理を行い、展示公開することが資料を預かった当館の責任であり、資料の保存と未来への継承につながるものと信じています。



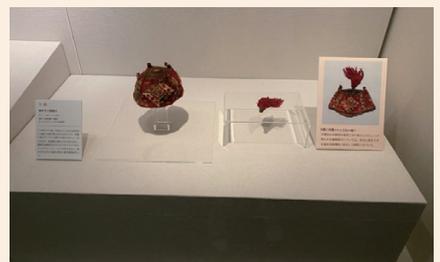
欠損のある染織品を帆布に綴じ付け、キャンバス状に仕立てる修理。キャンバスには染織品の裏側から組織を調査するための窓を開けた。(3期)



キャンバス中央の窓から覗いた作品の裏側



使用しないときは窓を閉じることができる



オリジナルの姿に戻す修理の一例。汎用海岸文化の帽子から後世に取り付けられた房飾りを除去した。(1期)

